

2015年度秋学期 応用数学（解析） 第7回

第2部・基本的な微分方程式  
2階線形微分方程式（1）

浅野 晃  
関西大学総合情報学部



1

## 2階線形微分方程式とは

2

## 2階線形微分方程式

一般には  $x'' + P(t)x' + Q(t)x = R(t)$

ここが恒等的に0なのが【斉次】  
そうではないのが【非斉次】

一番簡単なのは  $x'' + ax' + bx = 0$

定数係数の斉次方程式

とりあえず,  $x \equiv 0$  は解【**自明解**】

それ以外には？

3

## 2階線形微分方程式の解

とりあえず

$x'' + ax' + bx = 0$  に  $x(t) = e^{\lambda t}$  を代入すると

$$\lambda^2 e^{\lambda t} + a\lambda e^{\lambda t} + be^{\lambda t} = 0$$

$$(\lambda^2 + a\lambda + b)e^{\lambda t} = 0$$

ここが0になるような  $\lambda$  については

$x = e^{\lambda t}$  は解, その定数倍も解

$\lambda$  の2次方程式だから, みたす  $\lambda$  はたいてい2つ  $\lambda_1, \lambda_2$

一般解は  $x = C_1 e^{\lambda_1 t} + C_2 e^{\lambda_2 t}$   $x \equiv 0$  を含む

4

## おわり

5

## こんなんでいいのか？

6

### 本当に一般解であるためには

$x = C_1 e^{\lambda_1 t} + C_2 e^{\lambda_2 t}$  が本当に一般解であることは、以下の2項目が正しいことと同じ

#### 1. 解が一意

初期値  $x(t_0), x'(t_0)$  を定めると、特殊解はひとつに定まる 初期値はこの2つ

#### 2. 1次独立な特殊解の1次結合で一般解が表せる

1次独立な特殊解  $x_1(t), x_2(t)$  が得られれば、一般解は  $C_1 x_1(t) + C_2 x_2(t)$  で表される

7

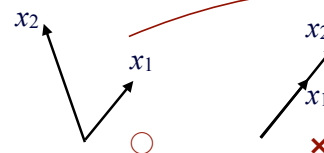
### 本当に一般解であるためには

#### 2. 1次独立な特殊解の1次結合で一般解が表せる

1次独立な特殊解  $x_1(t), x_2(t)$  が得られれば、一般解は  $C_1 x_1(t) + C_2 x_2(t)$  で表される

#### 2つの関数が1次独立とは

$C_1 x_1(t) + C_2 x_2(t) = 0$  がどんな  $t$  についてもなりたつのは、 $C_1 = C_2 = 0$  のときだけ



解全体は  
2次元ベクトル空間  
をなす

8

## 本当に一般解であるためには

1. 解が一意
2. 1次独立な特殊解の1次結合で一般解が表せる

さっきの例では

$e^{\lambda_1 t}, e^{\lambda_2 t}$  は  $\lambda_1 \neq \lambda_2$  なら1次独立

一般解は  $C_1 e^{\lambda_1 t} + C_2 e^{\lambda_2 t}$  だけで、他にはない

一般の斉次形  $n$  階線形微分方程式  
(定数係数でない場合も含む) についてなりたつ

定数係数の場合に、証明してみる

2015年度秋学期

9

## 行列で表現する

$x'' + P(t)x' + Q(t)x = R(t)$  を,  $x_1 = x, x_2 = x'$  とおいて

$$\begin{aligned} x_1' &= x_2 \\ x_2' &= -Q(t)x_1 - P(t)x_2 + R(t) \end{aligned} \quad \text{と表す}$$

行列で

$$\begin{pmatrix} x_1' \\ x_2' \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 0 & 1 \\ -Q(t) & -P(t) \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \end{pmatrix} + \begin{pmatrix} 0 \\ R(t) \end{pmatrix}$$

$$\mathbf{x}' = A(t)\mathbf{x} + \mathbf{b}(t)$$

1階線形微分方程式の形になる  
何階線形微分方程式でも、この形にできる

2015年度秋学期

10

## 条件1の証明の概略

1. 解が一意

初期値  $x(t_0), x'(t_0)$  を定めると、特殊解はひとつに定まる

リプシッツ条件をつかう

2015年度秋学期

11

## 特異解と解の一意性

初期値がひとつ定まったときに、  
解がひとつだけに決まることを、  
解が一意(unique)であるという

一意性の十分条件のひとつ「リプシッツ条件」

微分方程式が  $x'(t) = f(t, x)$  のとき、  
初期値のまわりでどんな  $x_1, x_2$  についても

$$|f(t, x_1) - f(t, x_2)| \leq L|x_1 - x_2|$$

となる定数  $L$  があるなら、その初期値について一意

$x$  のわずかな変化について、  
 $f$  がいくらでも大きく変化する、ということはない

2015年度秋学期

12

## 条件 1 の証明の概略

### 1. 解が一意

初期値  $x(t_0), x'(t_0)$  を定めると、特殊解はひとつに定まる

### リップシッツ条件をつかう

$x' = A(t)x + b(t)$  の右辺について、関数  $x, y$  を考えると

$$\|(A(t)x + b(t)) - (A(t)y + b(t))\| = \|A(t)x - A(t)y\| \text{ で,}$$

$$\|A(t)x - A(t)y\| \leq (\|A(t)\|) \|x - y\| \text{ となるような}$$

ノルムがある

ノルムが連続なので、任意の有界閉区間で  
上限が存在する

リップシッツ条件  
が成り立ち、一意

2015年度秋学期

13

## 条件 2 の証明の概略

### 2. 1次独立な特殊解の1次結合で一般解が表せる

1次独立な特殊解  $x_1(t), x_2(t)$  が得られれば、

一般解は  $C_1x_1(t) + C_2x_2(t)$  で表される

斉次形の場合を考える  $x' = A(t)x$

プリントは  $n$  階の場合を示しているが、

ここでは2階の場合を示す

まず、

$$e_1 = (1, 0), e_2 = (0, 1)$$

一般解を  $x(t)$  とするとき

は、2次元の基本ベクトル

$t = t_0$  のときの初期値は  $x(t_0) = x_1e_1 + x_2e_2$  の形で表せる

2015年度秋学期

14

## 条件 2 の証明の概略

### 2. 1次独立な特殊解の1次結合で一般解が表せる

$x' = A(t)x$  の特殊解を、2つ考える

初期値  $x(t_0) = e_1$  をみたすもの  $\xi_1(t)$

$$e_1 = (1, 0), e_2 = (0, 1)$$

は、2次元の  
基本ベクトル

初期値  $x(t_0) = e_2$  をみたすもの  $\xi_2(t)$

この特殊解  $\xi_1(t), \xi_2(t)$  は、1次独立。本当？

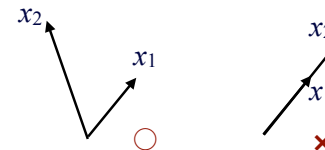
2015年度秋学期

15

## 本当に一般解であるためには

2つの関数が1次独立とは

$C_1x_1(t) + C_2x_2(t) = 0$  がどんな  $t$  についても  
なりたつのは、 $C_1 = C_2 = 0$  のときだけ



2015年度秋学期

16

## 条件 2 の証明の概略

### 2. 1次独立な特殊解の1次結合で一般解が表せる

$x' = A(t)x$  の特殊解を, 2つ考える  
 初期値  $x(t_0) = e_1$  をみたすもの  $\xi_1(t)$   $e_1 = (1, 0), e_2 = (0, 1)$   
 初期値  $x(t_0) = e_2$  をみたすもの  $\xi_2(t)$  は, 2次元の  
 基本ベクトル

この特殊解  $\xi_1(t), \xi_2(t)$  は, 1次独立

$\therefore c_1\xi_1(t) + c_2\xi_2(t) = 0$  が任意の  $t$  についてなりたつとする  
 $t = t_0$  のときも当然なりたつ

$$c_1\xi_1(t_0) + c_2\xi_2(t_0) = 0 \quad e_1, e_2 \text{ は 1次独立だから}$$

$$c_1e_1 + c_2e_2 = 0 \quad \leftarrow \text{これがなりたつのは } c_1 = c_2 = 0 \text{ に限る}$$

2015年度秋学期

17

## 条件 2 の証明の概略

### 2. 1次独立な特殊解の1次結合で一般解が表せる

初期値  $x(t_0) = e_1$  をみたす  $\xi_1(t)$

初期値  $x(t_0) = e_2$  をみたす  $\xi_2(t)$

一般解を  $x(t)$  とするとき

$t = t_0$  のときの初期値は  $x(t_0) = x_1e_1 + x_2e_2$  の形で表せる

特殊解の1次結合  $x_1\xi_1(t) + x_2\xi_2(t)$  を考えると

$t = t_0$  のとき  $x_1e_1 + x_2e_2$

どちらも同じ初期値をもつ

• 一般解で表された  $x(t)$

• 特殊解の1次結合  $x_1\xi_1(t) + x_2\xi_2(t)$

一意だから, それらは同じ解

$$x(t) = x_1\xi_1(t) + x_2\xi_2(t)$$

2015年度秋学期

18

## 定数係数の 斉次形 2 階線形微分方程式を 解く

## 2 階線形微分方程式を解く

$$x'' + ax' + bx = 0 \quad \begin{array}{l} \text{定数係数の} \\ \text{斉次形 2 階線形微分方程式} \end{array}$$

$\lambda^2 + a\lambda + b = 0$  をみたす  $\lambda$  について  $x = e^{\lambda t}$  は解  
 特性方程式という

特性方程式の解の形によって, 3パターン

異なる2つの実数解の場合

異なる2つの虚数解の場合

重解の場合

2015年度秋学期

20

19

## 実数解が2つの場合

特性方程式の  
異なる2つの実数解  $\lambda_1, \lambda_2$

微分方程式の  
1次独立な解  $e^{\lambda_1 t}, e^{\lambda_2 t}$

一般解は  $x(t) = C_1 e^{\lambda_1 t} + C_2 e^{\lambda_2 t}$

(つまり、最初のとおり)

2015年度秋学期

21

## 虚数解が2つの場合

一般解は  $x(t) = C_1 e^{(\alpha+i\beta)t} + C_2 e^{(\alpha-i\beta)t}$

さらに計算すると

$$\begin{aligned} x(t) &= C_1 e^{(\alpha+i\beta)t} + C_2 e^{(\alpha-i\beta)t} \\ &= e^{\alpha t} (C_1 e^{i\beta t} + C_2 e^{-i\beta t}) \quad \text{なぜ三角関数になるのかは、また先で} \\ &= e^{\alpha t} (C_1 (\cos(\beta t) + i \sin(\beta t)) + C_2 (\cos(\beta t) - i \sin(\beta t))) \\ &= e^{\alpha t} ((C_1 + C_2) \cos(\beta t) + i(C_1 - C_2) \sin(\beta t)) \end{aligned}$$

定数を置き直して、一般解は

$$x(t) = e^{\alpha t} (C_1 \cos(\beta t) + C_2 \sin(\beta t))$$

振動を表している これも先で

2015年度秋学期

22

## 重解の場合

ふつうにやると、微分方程式の解は  
 $C_1 e^{\lambda_1 t}$  しか出て来ない

これと1次独立なもうひとつの解は  $t e^{\lambda_1 t}$

確かめるため、解を微分して、微分方程式に代入してみる

$$\begin{aligned} (t e^{\lambda_1 t})' &= \lambda_1 t e^{\lambda_1 t} + e^{\lambda_1 t} = (\lambda_1 t + 1) e^{\lambda_1 t} \\ (t e^{\lambda_1 t})'' &= \lambda_1 (\lambda_1 t + 1) e^{\lambda_1 t} + \lambda_1 e^{\lambda_1 t} = (\lambda_1^2 t + 2\lambda_1) e^{\lambda_1 t} \end{aligned}$$

微分方程式の左辺に代入すると

$$\begin{aligned} &(\lambda_1^2 t + 2\lambda_1) e^{\lambda_1 t} + a \lambda_1 t e^{\lambda_1 t} + b t e^{\lambda_1 t} \\ &= \{ \lambda_1^2 + a \lambda_1 + b \} t e^{\lambda_1 t} + (2\lambda_1 + a) e^{\lambda_1 t} \end{aligned}$$

$\lambda_1$ は特性方程式の解  
だから0

特性方程式の  
解と係数の関係で0

一般解は  
 $C_1 e^{\lambda_1 t} + C_2 t e^{\lambda_1 t}$   
見つけ方はプリントで  
(定数変化法)

2015年度秋学期

23

## 例題

2015年度秋学期

24

## 例題

$x'' - 5x' + 6x = 0$  を解いて、  
初期値  $x(0) = 1, x'(0) = 0$  での特殊解を求めよ。

特性方程式は  $\lambda^2 - 5\lambda + 6 = 0$  その解は  $\lambda = 2, 3$   
異なる2つの実数解なので、微分方程式の一般解は

$$x(t) = C_1 e^{2t} + C_2 e^{3t}$$

初期条件から

$$x(0) = C_1 + C_2 = 1$$

$$x'(0) = 2C_1 + 3C_2 = 0$$

$$\downarrow$$
$$C_1 = 3, C_2 = -2$$

よって、求める  
特殊解は

$$x(t) = 3e^{2t} - 2e^{3t}$$

## 今日のまとめ

定数係数・斉次形の  
2階線形微分方程式  $x'' + ax' + bx = 0$

今回は非斉次形  
(右辺が0でない)  
をやります